

障がい者スポーツと意識改革

尚美学園大学江頭ゼミ

佐藤友貴 井上ほのか 木次考太

小林嵩人 小林大気 出縄大輔

1 緒言

現在、日本の障害者数は、身体障害者 366.3 万人（人口千人当たり 29 人）、知的障害者 54.7 万人（同 4 人）、精神障害者 320.1 万人（同 25 人）であり、およそ国民の 6%が何らかの障害を有していることになる。（内閣府「平成 25 年版 障害者白書(概要)」 「障害者施策総合調査」によると 40.5%の障害者が何らかのスポーツ・文化芸術活動に参加していると回答している。決して少なくない数である。

そこで我々は障がい者スポーツに着目した。笹川スポーツ財団の政策提言にもあるように、障がい者スポーツはリハビリの延長という考え方から、日常生活の中で楽しむスポーツ・競技するスポーツに変わり、障がい者と健常者が区別することなく、社会全体が共にすることが望ましいという理念の実現が必須である。そこで我々は笹川スポーツ財団の政策提言では具体的に示されていない、障がい者と健常者が共にするための方法を提言する。

2 健常者と障がい者の壁

私達は障がい者スポーツの現状はどうなっているのか、また障がい者と健常者が区別することなく、社会全体が共にすることが可能なのかサッカーを通じて実際に体験した。

調査 1 知的障がい者スポーツの体験

調査場所…FC トラッソス(NPO 法人トラッソスが運営する、東京都江東区を拠点とし、知的障害児・障害者を中心とするサッカー等のクラブチーム)

体験内容…サッカーの練習(コーチとして参加)

ボールを使った交流

ドリブル、シュート

2 対 2、3 対 3 のミニゲーム 等

体験した結果

体験前は障がい者に対してどのように接していいのかわからず、無知な状態であるせいで少なからず偏見を持っている事に気づかされた。しかし僅かな時間共にサッカーをただで個人差はあるものの、大半の障がい者とコミュニケーションを取ることができた。

だが今回のような機会がない限り、普段の生活の中で障がい者と触れ合う事は極めて少ない。

以上の事から笹川スポーツ財団の障がい者と健常者が区別することなく、社会全体が共

にすることがこのままでは実現するのは難しいと考えた。

2.1 健常者側の偏見

コーチ体験により、私達に偏見があることに気づく。これは他の健常者にも言えることではないのかと考えた。

内閣府による「障害者に関する世論調査」によると、「障害のある人に対し、障害を理由とする差別や偏見があるか」という質問に、「少しはあると思う」人を含めて、89.2%の人が「あると思う」と回答した。

ほとんどの健常者には、障がい者に対して少なからず何らかの偏見を持っていると分かった。

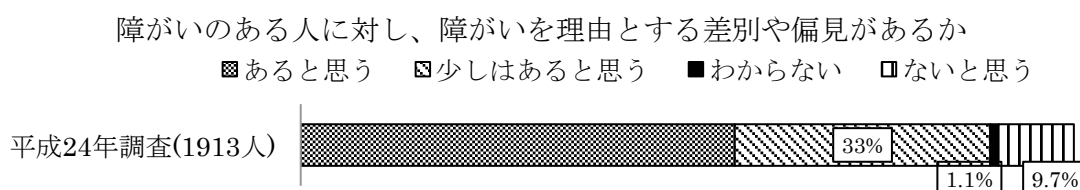


図 1 偏見の有無

出典 内閣府「障がいに対する世論調査」

2.2 障がい者の偏見

逆に知的障がい者側は健常者のことはどう考えているのか調査を行った。

調査2 障がい者インタビュー

私達はトラッソスのコーチや知的障がい者へインタビューを行った。

コーチの目線から知的障がい者は健常者に対して偏見があると思うか意見を尋ねた。

コーチ「知的障がい者の子は基本的に、健常者に対して偏見は持っていない。しかし、何らかの恐怖体験をしてしまった子は、健常者を苦手になっている子もいる。」と答えた。

トラッソスへ通う知的障がい者へ「健常者のことをどう思うか」と質問すると、「少し怖い」と回答する知的障がい者もいた。

また、内閣府の「障害者施策総合調査」によると、障害者の68.0%が障害を理由とする差別や偏見を受けたことがあると回答している。

以上の結果から、障がい者側には、健常者にあまり偏見はない。しかし、健常者が原因となって苦手になっている障がい者も存在する事も分かった。

3 健常者の意識を変える

健常者には知的障がい者に対する偏見があり、知的障がい者は健常者によって恐怖心を抱いてしまう現状であると分かった。

この偏見、関係性を無くす為に私達は次のような仮説を立てた。

仮説

健常者と知的障がい者が一緒にスポーツをすることにより、健常者が持つ知的障がい者への偏見を減少させる事ができるのではないかと考え、上記の仮説をたてた。

私達は調査1の体験により、知的障がい者のことを知り、偏見を減少させる事ができた。また、障がい者の障がい者と交流を深めることが出来た。この体験が他の健常者にも同様な効果をもたらすのではないかと考え、上記の仮説をたてた。

3.1、実験1(実施中) 健常者の変化

《健常者対応》

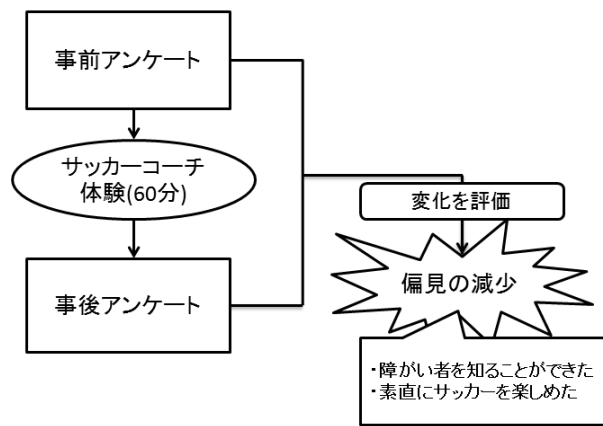


図2 健常者対応

知的障がい者と接触したことが無い大学生を対象に、実際にFCトラックスで約60分間のサッカーコーチ体験を行ってもらった。体験前・体験後にそれぞれ同じアンケートをとる。体験前・体験後のアンケートを比較すると、「障がい者の事を知ることができた」「楽しむことが出来た」などの回答が多く、健常者の偏見が減少した。

3.2、実験2(実施中) 障害者の変化

《障がい者対応》

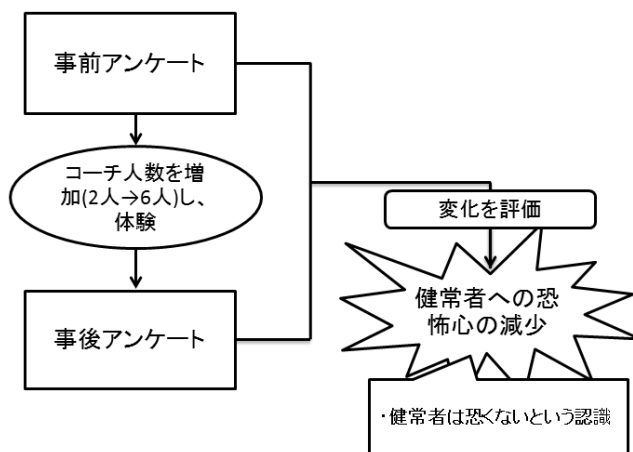


図3 障がい者対応

FCトラックスに通う知的障がい者を対象にし、健常者の大学生がサッカーコーチとして一緒にサッカーを行う。普段のコーチ数を増加(2人→6人以上)させ、1か月間調査をした。毎回体験前・体験後にそれぞれ同じアンケートをとる。アンケートの結果をみると、「いつもよりコーチが多くて楽しかった」「恐くなくなった」などの回答が増加し変化が見られた。

4 問題点

知的障がい者は、普段限定されたコミュニティで生活をしているため、一般の健常者と触れ合う機会があまりない。そのため健常者に対して「怖い」などの誤解を持ってしまっている。

健常者も普段知的障がい者と触れ合う機会がないために障がい者についてわからないことが多い。そのため知的障がい者を正体不明なものとし、区別的な偏見を持ってしまっている。この誤解・偏見を変え、区別のない社会を目指すためにスポーツが有効であると考えた。

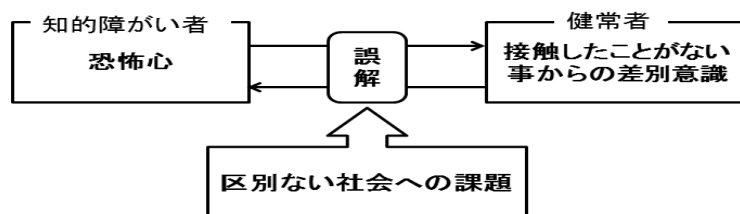


図 4 問題点

5 まとめ・政策提言

笹川スポーツ財団の言う、障がい者にとって区別ないスポーツ環境だけでなく、日本社会全体を”区別ない”社会にするためには、知的障がい者と健常者が一緒にスポーツをすることが有効であると明らかになった。

多くの健常者が、正しい形で知的障がい者と接触するためのスポーツ機会の創出知的障がい者は、閉ざされたコミュニティ以外の人との接触機増加のためのスポーツ創出をするべきである。

具体的実施策は、プレゼンテーションで。

<参考文献>

内閣府「障害者白書」

<http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/index-w.html>

NPO 法人トラッソ

<http://tra-tra.jp/school.html>

笹川スポーツ財団「政策提言」

http://www.ssf.or.jp/research/proposal/social3_04_01.html